

多くの感動を与えて先月閉幕した東京パラリンピックでは、スポーツの分野において多様性に基づく共生社会の実現が掲げられました。本来的にスポーツの世界と経済の世界とは競争の面で軌を一にしており、現にスポーツ選手であった方が経済界で活躍されている例は枚挙にいとまがないほど見られます。しかし、こうした「多様性」（生物の多様性）や「共生」や「競争」（生存競争）、さらにSDGs（持続可能な開発目標）における「持続可能性」（サステナビリティ）などの重要語は、いずれも自然環境や生態系（エコシステム）にかかわる地球環境問題に由来しています（詳細は中央経済社刊『地球環境辞典』参照）。

一方、いまだ新型コロナウイルス感染が収束せず、ワクチン接種や新薬開発が進められてはいるものの、経済正常化は予断を許さない不確実な状況が続いています。とくに飲食業・宿泊業・観光業などに携わる中小企業では、今後もコロナ禍に起因する倒産や廃業の懸念が残ります。このような厳しい経済情勢だからこそ「経済を読む」観点から注目したいのが、20世紀を代表する著名なイギリスの経済学者ケインズが提唱した「アニマルスピリット（animal spirits）」という概念。

動物の活動に由来するアニマルスピリットは、直訳すれば「動物的精神」となりますが、経済的には「不確実な状況を乗り切る際に必要な、企業の経済活動の原動力となる野心的意欲」と解釈されており、5年ほど前に



HIROFUMI TANGE

## ハンタースクールに 高まる期待へ4

丹下博文氏

一九五〇年、愛知県生まれ。早稲田大学法学部卒業、同大学院法学研究科修士課程修了。米コンベンシア大学経営大学院修了（MBA）、同大学院客員研究員。UCLA（米カリフォルニア大学ロサンゼルス校）経営大学院および社会公共政策大学院客員研究員、愛知学院大学教授を経て現在は企業経営総合研究所代表、博士（経営学）。主著に『企業経営の社会的性研究を含む企業経営研究』三部作（中央経済社刊）など多数。環境経営学会から学会賞（学術貢献賞）、日本物流学会から学会賞（著書）を受賞。

経済産業省で指標化による経済分析が試みられたという経緯が見られません。つまり、このアニマルスピリットはウィズコロナ時代に経済活動と感染対策を両立させるうえで重要な起業家精神とかハングリー精神（詳細は中央経済社刊『企業経営の社会的性研究』参照）に通じるところがあるわけです。実際、緑の多い森林などの自然環境が教育や研究とともにイノベーション（技術革新）にも好影響を与える現象は、昔から指摘されています。

こうして期待が高まるのが、キャリア技研株式会社（本社管理本部は名古屋ルーセントタワー39階、富田茂社長）によって3年前に設立されたジュラテクノロジー株式会社（本社は北海道広尾郡大樹町）が運営するハンタースクール『森のハンター教習所』。いまやハンティング（狩猟）は、多大な経済的損失につながる有害なシカやイノシシによる農作物被害を減らす社会貢献となるだけでなく、アウトドア指向が強くなったコロナ禍ではスポーツや趣味としての側面も備え、さらに雄大な大自然から経済活動を推進する知恵や精神を学ぶことができると考えられるからです。すでに農業、漁業、林業で同じような傾向が見られるのではないのでしょうか。

このハンタースクールが大自然を背景に育成を目指す次世代ハンターは、最先端技術のドローン（小型無人機）やセンサーを活用する点で、まさに「スマートハンター」と呼べるでしょう。（続く）